

Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第109回定期演奏会

1989年7月4日(火)PM6:00開演 ● バリオホール

日本作曲家協議会による出品16作、作曲家自身の指揮やお話し

邦楽器の祭典

企画・構成＝三木 稔

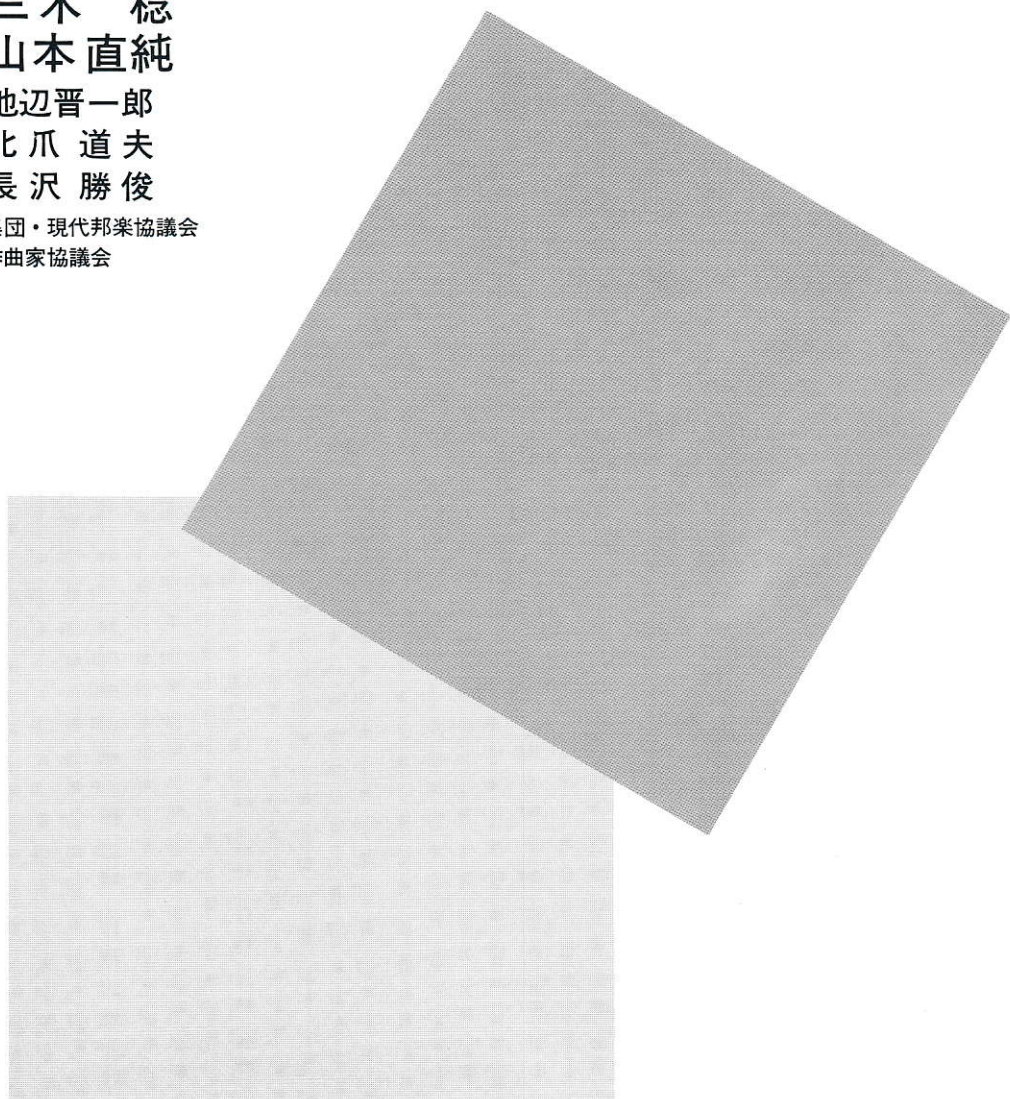
司会＝山本直純

実行委員＝池辺晋一郎

北爪 道夫

長沢 勝俊

主催＝日本音楽集団・現代邦楽協議会
(社)日本作曲家協議会



ごあいさつ

この度、作曲家協議会の皆様のご協力を得て一挙に16曲もの邦楽器作品が生れることを大変嬉しく思います。

最近では作曲家の方々が邦楽器のための作品を書くことはごく当り前のことになってきました。この数週間、日本音楽集団の練習場へは大勢の作曲家が出入りされ、邦楽器やメンバーたちとの交流が盛んに行われています。作曲家との共同作業で進めてきた日本音楽集団の25年の歴史の上に更に発展を期すためにも、私たちの練習場が一層こういった交流の場として賑わうことを期待します。

日本音楽集団 田村 拓 男

祭りの当家を求めて

日本作曲家協議会(JFC)は、数年前から各プロ合唱団などと共催で「合唱の祭典」を行い、仲々好評を得ています。

経済的に恵まれない音楽家たち同志ではあっても、作曲家と演奏家が共同で事業を行えば解決できる問題は沢山あります。

器楽の分野に拡げたい、祭りは鳴物入りで巾広く派手にやりたい、とくれば日本の祭りを担ってきた邦楽器が先棒担ぐが当然です。日本音楽集団の定期の場を借りて、12の新作(!)を含むさまざまなタイプの今様エスニック音楽をお楽しみ下さい。

日本作曲家協議会 三 木 稔

大政直人

Evening Shadows I (初演)

この曲は、聴いて頂ければ分るように、尺八と琴のためのイーージーリスニングな作品です。モードを使っていますが、こういったスタイルの曲は、ともすれば安易な音の羅列になってしまうため、単調にならないように、機能と声的な部分もわずかでずが出現します。ただし、そのような構成になったのは、あくまでも結果であって、最初から意図してそのように作曲したわけではありません。最後に、本日演奏して下さる日本音楽集団の方々に心から感謝いたします。

[尺八] 水川寿也
[箏] 大島菜穂子

川崎絵都夫

萌揺(きさくらぎ)の譜(初演)

萌揺(きさくらぎ)とは、如月(きさらぎ、旧暦の2月=現在の3月にあたる)の語源説の一つです。「『きさらぎの季節』は、植物の生長が始まるとともに、寒暖の変化が大きく、また『花開いて雨多し』の季節でもある。」(倉嶋 厚)曲は最初に出てくる主題から自由に発展していき、最後にもう一度主題が戻ってきて、静かに終わります。ほっと息のつけるような音楽になっていると良いのですが。

[笛] 竹井 誠 [尺八] I 米澤 浩・II 水川寿也
[三味線] 養田司郎 [琵琶] 山田まゆ美
[二十絃箏] I 佐藤由香里・II 桜井智永
[十七絃] 大島菜穂子 [打楽器] 田村拓男・望月太喜之丞

眼龍義治

いのり(初演)

かんき、ふんぬ、かんどう、ひたん、かんしゃ、ぞうしつ、かんこ、ひあい、かんしょう、ひふん、あいそ、じゅそ、ねがい。瞬時も安かならず、うつろい、ただよう心。そして、いのり。

曲は平調子を中心に中空調子、雲井調子が錯綜しつつ展開します。邦楽器の古典的技法による平易な作品です。アマチュアの方々にも十二分に演奏していただけたらと思います。

[尺八] 素川欣也 [胡弓] 坂田進一(客演)
[箏] I 内藤洋子・久東寿子 II 高橋はるな・桜井智永
[十七絃] 山田明美

草野次郎

風 宴(初演)

大学時代より今日まで、アカデミックな音楽教育を受け、西洋の楽器を主体に曲を書いてきた私ですが、一度機会があれば邦楽器によるアンサンブルを書いてみようと思っていました。それは邦楽器の音それ自体に、日本人である私の心をゆさぶる、何か言葉で表現できないものを感じるからです。曲は緩～急～緩より成る小品で、全体にアカデミックな雰囲気ですが、私の邦楽器への想いの第1作です。

[尺八] I 三橋貴風・II 素川欣也
[箏] 内藤洋子 [十七絃] 佐藤由香里

小橋 稔

火 男(ひょっとこ) (初演)

火を得る為にギリシャの神は大火傷を、日本の神は火をお産みになって命を落とされました。その火を人々の生活にもたす為につかわされた火男は一生懸命火をおこしてまわりました。火は燃え、人々は喜び、口のとがってしまった火男は人々の人気者になったのです。しかしガス栓をひねれば火が燃える時代になって、火男はどんなに思っているのでしょう。この曲はそんな火男への挽歌です。※ひょっとこの 世に忘らるる 夏日かな※

[笛] 竹井 誠 [尺八] 米澤 浩 [三味線] 工藤哲子
[箏] 吉村七重
[打楽器] 田村拓男・細谷一郎・望月太喜之丞

青木暢男

祭りの幻想による序章 (初演)

夏。日本の祭りの頃。お神輿を担ぐ若者達のエネルギーの爆発。一方静かな路地には漆黒のような夜の帳りを背景に明りのついた提灯が家々の軒下につるされ浴衣を着た女の子がカタカタと下駄の音をさせながら一人二人と集り線香花火をしている。遠くから風のまにまに聞こえてくる祭りの笛の音。子供達にもわかる様に易しく簡明直截に、動と静の対比を日本風な音でまとめました。

[笛] 西川浩平 [尺八] 素川欣也 [三味線] 田中悠美子
[琵琶] 田原順子 [二十絃箏] I 熊沢栄利子・佐藤里美
II 高橋はるな [十七絃] 大島菜穂子
[打楽器] 田村拓男・高橋明邦

見目順一郎

サラスヴァティーへ「風」 (初演)

サラスヴァティーはヒンドゥー教の音楽・学問の女神で、琵琶を持つ弁才天の原姿。「風」は尺八吹奏時にその音未だの「こと」と音その「もの」との「あいだ」に生ずる。「あいだ」の共通感覚(センス・コムニス)としての「気分」を軸に、日本においてインドを憧憬する姿を描く。憧憬「する」という主語的行為は、日本という述語的狀態に統合され、再び「日本」を醸成する伝統と「なる」。これがこの曲の「鳴る」ところであり、これを常識(コムン・センス)に訴えたい。

[尺八] I 三橋貴風・II 水川寿也・III 素川欣也
[琵琶] I 半田淳子・II 坂田美子 [打楽器] 望月太喜之丞

宮城純一

和楽器合奏のための「シータVII」 (初演)

十七絃独奏による短い前奏に続き、アジア風なモチーフがインド音楽やミニマル・ミュージック等の手法によって展開して行く。後半では、ロック風のオスティナートにのって篠笛と尺八などがからみ合う。題名の「シータ」は、インドの叙事詩「ラーマヤナ」のヒロインの名前からとったが、曲の内容と直接の関係はない。今回の演奏会のため1989年3月末に作曲。

[笛] 西川浩平 [尺八] 素川欣也 [三味線] 太田幸子
[二十絃箏] I 宮越圭子・II 山田明美
[十七絃] I 熊沢栄利子・II 久東寿子 [打楽器] 高橋明邦

下山一二三

邦楽器のための「カタリシス」第3番

この作品は1983年に谷珠美、佐藤順子、竹井誠、高橋明邦の皆さんの北欧、特にスウェーデンとデンマークの演奏旅行のために書いたもので、初演はスウェーデンの北部のウーメオ市で行なわれ、その後いろいろな場所で演奏されている。「カタリシス」という題名の作品は今までに三曲あって、何れも演奏者が声を発するという共通点を持っている。

[笛] 竹井 誠 [三味線] 野口美恵子
[箏] 宮越圭子 [打楽器] 細谷一郎

鈴木英明

「律」——和楽器のための四重奏曲—— (初演)

この作品は、本日の演奏会のために作曲したものである。従って内容も「聞き易い楽しい作品を」というJFCの主旨に出来るだけそうかたちで作曲した。曲は、箏によって表われる断片的な旋律が響きの中に拡散していく第一部と、尺八の自由なエキスプレッションを中心とする第二部と、各楽器による協奏風で律動的な第三部から成っている。タイトルの「律」は一般には音楽用語として多義的に用いられるが、ここでは調和、躍動を象徴する言葉として用いた。

[尺八] 三橋貴風 [箏] I 吉村七重・II 熊沢栄利子
[十七絃] 宮越圭子

杉浦正嘉

更衣(ころもがえ) (初演)

鞍馬の麓から頂上の大杉、更に魔王堂から貴船の谷への深い樹林、遠い古代からの貝類や歴史と物語り、魑魅魍魎のさまよう世界を包み込みつつ木々は年々新しい葉で装い、自然はそのまに人も含め広大に更衣をする。貴船川の水も又同じ。橋に立って流れを見れば水は流れ橋は流れず、橋は流れ水は流れず、水は流れ橋も流れる等々と見える。それらは常に常でない。常でない常の更衣だ。この曲はこの自然の姿のイメージより、篠笛、能管、小鼓・大鼓によりまとめたものです。

[笛] 西川浩平
[打楽器] 細谷一郎・望月太喜之丞

中村晃也

変様 Modification for Shakuhachi and Sō

私が邦楽作品を書くということは、弦楽四重奏を書くということとあまり違いはない。日本に生まれた私は、作曲家として元々「はざま」に居るのである。勿論、楽器や奏者の特性は最大限に考慮するが、私の本質的な感性や音楽語法が変わるわけではない。ただ驚くべきことは、たゆまぬ精進を重ねた立派な邦楽演奏家が、あのデジタル的な定量譜からアナログ的な邦楽の要素を見事に引き出してくれることである。これを〈変様〉の意味と捉えていただきたい。

[尺八] 三橋貴風
[箏] 白根きぬ子

増本伎供子

小さな風 ―二面の箏と二管の尺八のための―

1972年に箏の鳥居名美野さんのリサイタルのために「尺八と合奏するものを」という事で委嘱され、鳥居さん、亀山香能さん、尺八の山本邦山、井藤麗山の諸氏によって同年秋に初演されました。爾後、現・音・秋の音楽展、尺八1979、深新会系の作曲家有志による「邦楽器による作品展」、京都大学尺八千鳥会定・演などでもとり上げられたり、放送も何度かされたり、小曲の割には皆さんに可愛がられています。「小さな風」とは、こずえをさっと駆けぬけて、枝をかすかにそよがせるようなささやかな風の事です。

[尺八] I 米澤 浩・II 竹井 誠

[箏] I 坂井敏子・II 吉村七重

綿村松輝

三本の尺八のための「序」(初演)

深い響き、緊張感ある高音、ゆったりとした幅広い低音等、多彩な表現力をもつ尺八は私の心を魅了する。音のもつ内面的な表現が理屈ぬきで私の心の深層をゆり動かす。以前からの尺八への憧れが、今夕の演奏会で実を結びました。

「序」の中では、「ゆり」が強調されています。それは、私達のもつ音感の代表的なものであり、長い歴史を経てはぐくまれ、その時々のおもいが深くこめられているようです。

[尺八] I 米澤 浩・II 竹井 誠・III 水川寿也

柳田孝義

破墨山水図

「墨に五彩あり」……これは、水墨画の表現に使われる有名な言葉だが「五彩」にはすべての色を含む、というよりすべての色を超越する、という意味がこめられているという。破墨とは澁墨(はつぼく)ともいい、現代美術でいえばアクションペインティングとかドリッピングに通じるような墨をバラ撒き、一気呵成に描く手法のことである。これにより、雪舟の山水図は印象派の表現を400年も前に先取りしていた、とも云われている。この曲は尺八3、鼓2、の簡素な編成で書かれている。

[尺八] I 米澤 浩・II 水川寿也・III 素川欣也

[打楽器] 細谷一郎・望月太喜之丞

山本直純

「平成元年のための已楽」―和楽器合奏のために(初演)

[秦琴] 深草アキ(特別出演)

楽器と云うものを人類が楽しむ様になって永い時が流れた。○日本の楽器が当り前だった時代。○日本の楽器が珍らしくなった時代。そして今、日本の楽器、音楽を改めて考え直す時代がやって来た。日本人のたべ物、そばやうどんをいつまでも愛するように、日本で生まれ、育った楽器を、もう一度心ゆくまで楽しんで載きたい。そんな気持ちから、フルート合奏や、ブラスバンドの為に書いた「平成元年の序曲」を改訂して、「平成元年の已楽」としました。

[笛] 西川浩平 [尺八及び笛] 三橋貴風・竹井誠・米澤浩
[三味線] 工藤哲子 [太神] 田中悠美子 [琵琶] 半田淳子
[箏] 坂井敏子・吉村七重 [十七絃] 宮越圭子
[打楽器] 田村拓男・細谷一郎・望月太喜之丞

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(792)8481



オリジナル立奏台



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25

オリオンシャトー1F

PHONE. 03-397-2292